

おすすめ本

分館運営委員会 運営委員
渡 邊 賢 一 郎 教授
(国際金融論(英) I・II)

ドキュメント沖縄経済処分 密約とドル回収 軽部謙介著

岩波書店 2012年

皆さんは、沖縄返還を巡る「密約」問題について耳にしたことがあるでしょうか。日本政府は1971年の沖縄返還協定締結の見返りとして米国政府に対して巨額の財政支援を約束しましたが、その存在は、2010年の民主党政権下における調査結果公表まで、長年国家機密として扱われてきました。本著は、返還前に沖縄で流通していた米ドルの処理という政治的に取扱いの難しい問題について、日米政府間でどのような交渉が行われ、最終的に密約の中にどのように組み込まれていったかを詳細に描いています。

本著が提起しているテーマは大きく2つあります。第1に、通貨発行権は国家の基本的機能であり、それは国民生活に重大な影響を与えるということです。沖縄において国家主権が米国から日本に移転するということは通貨発行権も同時に移転することを意味します。本著は、詳細な取材に基づき、ブレトンウッズ体制崩壊の瀬戸際にあった当時の国際通貨情勢の下での密約の意義や、そうした国際経済の大波に翻弄された沖縄の人々の生活に新たな視点から光を当てています。第2に、歴史的公文書の保管・公開ルールの重要性です。実は日本政府が一貫して否定してきた密約の存在に注目が集まった契機は、米国の国立公文書館において沖縄返還関連文書の機密指定が解除され、情報が公開されたことです。本著の内容も少なからず米国の行政文書に依拠していますが、日本ではこの問題に関連する多くの行政文書が既に消失しています。私自身、この密約問題の情報公開において日本銀行の責任者の1人として関与しましたが、国家の重要な意思決定に関する歴史的検証を行うために文書を後世に残すことの重要性を痛感しました。昨今、森友問題などを契機に行政文書の保管ルール見直しが進む機運が高まっていますが、本著は、そうした問題をも提起しています。

なお、沖縄密約問題は、山崎豊子の小説「運命の人」(2009年)の中で、密約取材に絡んで機密漏洩教唆の罪に問われた新聞記者の半生を通してドラマチックに描かれたことで、多くの人々の関心を集めました。こちらも併せて読まれることをお勧めします。

貨幣進化論 「成長なき時代」の通貨システム 岩村充著

新潮選書 2010年

「貨幣とは何か」という問題は、金融論においてもっとも根本的な問いですが、それに答えることは簡単ではありません。本書では、貨幣がどのように作り出され、人類の歴史とともにどの様に変容し、そして今後どこに向かっていくのかについて、学界きつての論客である筆者が独自の視点を交えながら鋭く切り込んでいます。しかし決して難解な専門書ではなく、これから経済や金融を学ぶ初学者にも十分に理解でき、興味が湧く内容となっています。

本書の第1章は、「パン木の島の物語」と題され、太古の昔、まだ貨幣が発明されるずっと以前の時代に「パンの木島」という無人島に漂着した人々の生活が描かれています。その架空の島で起こった様々な物語を読み進めていくと、読者は貯蓄、利子率、貨幣、銀行などの概念の本質を自然と理解することができます。その後、物語は中世ヨーロッパに移り、金本位制の時代やブレトンウッズ体制の世界を経て、貨幣や金融を巡る歴史を辿りながら現代に到達します。そして物語の中には、「歴史に残るバブルたち」、「焼け跡と一銭五厘の旗」など50以上の興味深い小話がコラムとして挿入され、読者の関心を引き付けて離しません。

繰り返される金融バブルの生成と崩壊、国際通貨危機、マイナス金利、仮想通貨の出現など、現在の貨幣経済は大きな環境変化に直面しています。こうした現象の本質をどのように捉えたら良いのか、将来の通貨システムはどのような方向に進んでいくのかに関心を持つすべての読者にお勧めの好著です。